

いし
石

がみ
神

ゆたか
豊

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 192 号
学位授与年月日 平成14年 5 月23日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学位論文題目 西田哲学における自覚的論理の形成

論文審査委員 (主査)

教授 野 家 啓 一 教授 篠 憲 二
教授 座小田 豊

論文内容の要旨

はじめに

本論文は、西田幾多郎の哲学（以下、西田哲学と略す）を自覚の哲学と定位し、とくに前期西田哲学を中心に、その自覚的論理の形成をみようとするものである。

全体は二部構成となっており、「第一部 自覚の哲学としての西田哲学の生成」では『善の研究』（明治44年刊）以後、『自覚に於ける直観と反省』（大正6年刊）までの諸論文を対象とし、自覚的論理の形成過程を追求する。この第一部では西田の自覚的論理形成の経緯を追うことが主要な課題であるが、同時に前期西田哲学のもつ性格および問題点が示されることになる。「第二部 西田哲学の展開」では、考察の範囲を『善の研究』以前、およびいわゆる「場所」の思想成立以後の諸論文にも拡大し、いくつかのトピックを設定し、西田哲学の基本的性格の鮮明化に努める。第二部の最終章では、西田哲学における自覚の意義の深化を、デカルト的コギトのもつ問題に即し、西田哲学全体にわたって考察する。

西田哲学が自覚的性格を強くもっていることについては、ほぼ異論のないところであろう。しかし、その内容への討究の重要性に比して、いまだまとまった研究は少ないようにみえる。とりわけ重要と思われる、西田哲学生成期における自覚的論理形成の詳しい経緯、およびその特有の性格と意義についての研究はぜひとも必要であろう。本論文はできるかぎり西田の論述に即して読み解き、西田哲学研究における上記課題の一端を満たそうとするものである。

以下、本論文の内容について各章ごとに略述する。

第一部 自覚の哲学としての西田哲学の生成

第一章 〈自覚〉前夜の西田哲学

本章は、『善の研究』（明治44年刊）以後の2年半ほど（『自覚に於ける直観と反省』執筆にいたる、いわば「自覚前夜」）の期間において、「純粹経験」の立場がいかんにして「自覚」の立場へ進んでいったのかを問題とする。

経験の立場は心理主義的なものにすぎないとみられるおそれがあった。西田は『善の研究』以後、純粹経験の性格をさらに明確にしようとするが、それは論理化という課題を担うこととなった。そしてその論理は、純粹経験の性格からしても自己（それ自身）を問題とする論理、すなわち自覚的な論理の構築へと向かわざるをえなかったのである。

ドイツ観念論は自覚的論理の先駆的モデルの意味をもつといえるが、この時期に西田がもっとも考慮したものは、新カント派なかでもリッケルト（H.Rickert）の論理主義であった。西田の「認識論に於ける純論理派の主張に就いて」、「法則」、「論理の理解と数理の理解」の三論文は、純粹経験の論理化という課題に向かって、リッケルトに代表される論理主義の主張を批判的に超克しようとしたものであった。

初めの論文で、西田はリッケルトの所説を概括的に述べ、それに対する自らの純粹経験の立場を鮮明にする。西田は、経験の発展は思惟の発展であり、かつ論理をも基礎づけるものと考えた。ここで西田は数学者デデキント（J.W.R.Dedekind）の「体系が体系を写す」との表現によって、自覚的論理の萌芽というべきものを把握している。第二の論文は、種々の思惟法則の根底にあるものを問題とし、リッケルトのいう「論理的当為」も西田のいう「一般者」の自己実現であるとする。さらに第三の論文では、「理解」とはいかなることかを論じ、「論理的一般者」から「動的一般者」へといたることになる。西田の考える発展的論理とは、無限の進行であるが、それは同時に自らへの無限の深まりでなければならない。ここに、西田の立場が自覚の立場へと移行する経緯をみることができよう。また、この論文（そしてこれ以後）では「純粹経験」という言葉が意識的に避けられているとみられるが、これは西田の論理への志向を反映していると思われる。

第二章 「純粹経験」の理解をめぐる一高橋里美の批評一

西田の『善の研究』に対し、若き高橋里美が批評し（明治45年）、それに西田がただちに答えるという形で両者の対論がなされ、当時学界の注目を引いた。高橋の批評は、高橋独自の観点からしたものであり、西田にとっては的を射たものとは思われなかったが、この対論によって自身の立場をより明確にする必要を感じる事となる。

対論は「純粹経験」のあり方をめぐるものであった。その主要な論点は、高橋の批評文のタイトルが「意識現象の事実と其意味」とあるように、事実と意味の関係についてである。高橋にとっては、事実と意味は本質的に区別すべきものであり、事実は現実の意識現象であり、意味はそれが指示する可能世界とみられた。高橋からすれば、西田の純粹経験のありかたは事実であるとともに意味でもあり、この区別を軽視ないし無視し、その結果矛盾を引き起こしているとみられた。それに対し西田は、高橋の「事実」理解が思惟によって作為されたものであり、西田のいう事実そのものと異なるものであると反論する。そして事実即意味、意味即事実というのが自分の立場であると述べる。

後に高橋自ら、この時の対論における上記の自らの区別がまだ抽象的な区別であったことを

認めている。しかしながら、この対論をとおして、西田は自己の主張である「純粹経験における意味と事実の結合」の深い裏付けの必要を感じるようになった。この課題は直接に『自覚に於ける直観と反省』の目的と結びついていく。

第三章 自同律と自覚 — 『自覚に於ける直観と反省』(1)

本章、および次の章は大著『自覚に於ける直観と反省』(大正6年刊)を扱う。本章では、初めに西田哲学のもつ独特な性格について考察する。西田哲学はしばしば難解だと非難される。しかし、論理的にはそれが自覚的論理であること、文体としてはそれが思索の生成と一つであることに着目すべきであろう。とくに西田哲学生成期の代表的著作である『自覚に於ける直観と反省』には、まさしくこの二つの特徴が際だっている。

本章は次に、自同律(同一律)をめぐる西田の思索を詳細に検討する。自覚の哲学としての西田哲学にとって思惟と論理の関係はきわめて重要であるが、とりわけ「AはAである」との自同律には、思惟と論理が一体性においてある自覚が含意されているように思われる。しかし『自覚に於ける直観と反省』以前では、この含意が十分に表現されなかった。本書において西田は、論理は思惟の生成においてみられなければならない、「論理的自己同一の真相は自覚の意識にあるのである」と述べ、明確に自同律を自覚の立場から解意する。さらに、この自同律の示す「ものは己自身に同一でなければならぬ」という当為の意識は、われわれにとってもっとも具体的な体験であるという。ここで西田はフィヒテの事行(Tathandlung)を引き合いに出して、存在と当為が一つであることがもっとも深い意味の自覚であると述べる。しかし、フィヒテでは自覚が論理(自同律)を基礎づけるのに対し、西田ではむしろ論理(自同律)がそのまま自覚の意義をもつとすることで両者の相違もある。

ここから西田独自の自覚的論理の地平が開かれるとあってよい。すべて意識内容は、認識者をその中に含むことによって発展する。「ある」と「知る」の両契機をもつことによって自覚は無限に深まるが、それはまた同時に論理の展開でもある。以後の西田哲学の展開はここに可能となったといえる。

第四章 経験と時間 — 『自覚に於ける直観と反省』(2)

本章は、「経験」についての西田の時間論的分析およびその意義について論じる。「経験が発展的なもの」であるとは『善の研究』での主張であったが、われわれはたとえば「過去の経験」と「現在の経験」がどのような関係にあるかと問うことができよう。西田のいう「経験の発展、統一」とはいかなるものか。

この問題はベルクソン理解と深く関わってくる。西田は明治40年代にベルクソンの著作を精力的に学んだ。「ベルクソンの純粹持続」(明治44年発表)の論文では「純粹持続 *durée pure*」を時間論的に考察し、ベルクソンにおいては時間は過去から現在への一方向的な流れであることを確認している。この考察を前提にして、『自覚に於ける直観と反省』では、さらにベルクソンの意識論、時間論を詳しく検討する。

西田は、意識そのものはある意味で超時間的なものだと述べ、経験の統一は「永久の今」の立場だと主張する。極限点を含む連続こそ具体的なものであり、ここに「自覚的体系」が成立するという。自覚には個々の部分を成立させる変化の面と、全体を成立させる統一の面とがあるが、この両面が一つになったものが「自覚的体系」である。しかしベルクソンは前者の面の

みを見て、後者の面を見逃していると西田は指摘する。両側面が一つになった立場からベルクソンのいわゆる「エラン・ヴィタール élan vital」を考えるならば、それを自覚的点であるとともに自覚的体系としての内面的創造の中心とみることができると西田は述べている。

そして「永久の今」としての現在からいわゆる過去を考えると、過去は現在から規定され、したがって「過去の意味が変じる」ということができる。西田はそれを目的論的因果からする時間理解だとし、つねに限定の中心は現在にあるという。ここにベルクソンの「純粹持続」のもつ時間観念は批判されることとなる。そしてこの目的論的因果を成立させる究極の原因として、西田は本書の第39節で「意志」（フィヒテ的な絶対自由意志）の立場を主張する。つまり意志は時間を離れ、すべてを現在にもたらしすることができるのである。しかしながら、時間を超越する意志、反省できない意志とは、意志に何か自体的なもの、神秘的なものを残したことにものなるのではないだろうか。

第二部 西田哲学の展開

第一章 左右田喜一郎の西田哲学批判 —「場所」の論理をめぐって—

大正14、15年に雑誌に発表された西田の「場所」の考えは、従来の西欧の「主語的論理」に対して「述語的論理」に立つとするものであった。それは、前者が「意識」あるいは「意識された意識」の立場であるのに対し、「意識する意識」の立場であるといわれる。ここで当然ながら従来の認識論との関係が問題となる。とりわけカント的認識論との関係が問題となろう。この観点から問題提起をしたのが左右田喜一郎であった。左右田の批判（「西田哲学の方法に就いて—西田博士の教を乞ふ」大正15年）の要点は、ほぼ次の五点にまとめられる。—(1)西田哲学が知識の上位に意志を立てる理由は何か。(2)「場所」はなぜ「無」でなければならないのか。(3)「無の場所」の段階への疑問。(4)意志と直観の位置関係が不明であり、さらに上位のものが考えられるのではないか。(5)西田哲学は結局、認識論の立場を踏み越える独断的形而上学ではないか。

これらの左右田の批判はすべて「場所」の理解に係わる問題である。西田は「左右田博士に答ふ」（昭和2年4月発表）で、これらの批判に逐一答えを与えている。西田は、自覚の立場から認識論のあり方を考えている。「於いてある」という構造をもった「場所」、そしてすべてを包むものとしての「無の場所」も、自覚的認識論の立場であるといえよう。カントの認識主観にも場所的観点があるが、無の場所とはいえないと西田はいう。

西田からすると、左右田の批判は認識論の根底について深い反省を欠いたものと思われた。しかし当時の西田の「場所」の立場は、「論理化の端緒を得た」ものにすぎず、まだ具体性を欠いていた。西田の思索は、この左右田の批判を契機にさらなる論理化へと進むのであり、その点、左右田の批判は西田哲学の発展に大いなる意義があったとしなければならない。

第二章 西田幾多郎におけるヘーゲル—昭和6年頃までの記述を追って—

本章では西田のヘーゲル記述を追いつつ、その受容と批判をみることで、西田哲学の性格を鮮明にする。

西田のヘーゲル記述の変化は、大きくみて、「場所」以前と「場所」以後とで分かれる。「場所」以前では、「純粹経験」ないし「一般者」のありかたを、ほぼヘーゲル論理学（弁証法）に沿って説明している。しかし「場所」以後では、ヘーゲル弁証法に対して距離を置き、さら

に西田からの積極的批判も行うようになる。この批判の成立はまさしく「場所」の立場の成立と呼応している。すなわち、西田が「無の場所」を「矛盾そのものを映すもの」として主張するとき、ヘーゲル弁証法（とくに論理学の始元論）を内在的に批判する視点を獲得したといえる。

『一般者の自覚的体系』（昭和4年刊）において初めてはっきりとヘーゲル批判がなされる。批判の要点は、判断の根底にある一般者は自覚的なものでなければならないということであり、本来弁証法にはそうした自覚的意義がなければならないが、ヘーゲルではそれが不明瞭であり、主語的論理学、対象的論理学に留まっているということにある。一般に西欧の論理学は「知るもの」としての自己を主語的なものとして定立してしまうのであり、ヘーゲルといえどもそうした性格を逃れていない。それに対し、西田は自己の自覚的立場を述語的論理として主張したといえよう。

つづく『無の自覚的限定』（昭和7年刊）では量質ともに充実したヘーゲル記述がみられる。弁証法には、無にして有を限定する「自覚的限定」の意義がなければならない。西田の弁証法は「絶対無の自覚的限定」に基づいた「真の無の弁証法」である。それは、全体でありつつ一つ一つが絶対的なものである事実の世界を捉える論理（断絶の連続）である。それに対しヘーゲルの弁証法は「有の弁証法」「過程的弁証法」であり、この事実の世界を捉えることができないと西田は批判している。昭和6年頃（『無の自覚的限定』執筆時）は、ヘーゲル批判が明確に成立した時期であった。

第三章 宗教論（その一）—若き西田の宗教的思索—

第四章 宗教論（その二）—超越と内在の問題を中心に—

この二つの章は西田の宗教論を扱う。

『善の研究』が「宗教」編で完結していることは、早くから人生における真実の探求を宗教的なものに求めていた西田の考えを反映しているといえよう。『善の研究』以後の自覚的論理形成にとっても、宗教的なものはおそらくその底流にあるものであった。したがって本（石神）論文でも、彼の宗教観を検討する必要があると考えた。

第三章では、西田の第四高等学校時代における宗教的関心の芽生えから、『善の研究』の宗教論にいたるまでを、時代的背景の考察を交えつつ考察する。当初、西田は宗教心を「妄念」とし、「宗教」を「妄想」としていた。ここには当時の唯物論的啓蒙思想の影響をうかがうことができるが、その後、人生上の苦難に直面し、また参禅体験を通して、「真正の己」を得ることこそが重要であると考えられるようになる。この頃は高山樗牛が青年に強く影響を与えていた時代であるが、西田も当時の樗牛的ロマンチズムの影響を受けつつも、自らの問いをあくまで問い続けていたとみられる。

次に『善の研究』における宗教論を、(1)宗教における主観的側面、(2)対象的側面、に即して考察する。西田はここで、個人的生命はより大なる生命を求めざるをえないと主張し、また神観念をめぐって超越神および人格神の思想を検討している。とくに本来の宗教は「神人同性」であるという主張は、西田の宗教観の中心的思想である。しかし、ここから残された課題として、超越と内在の関係性の問題が提起されよう。

第四章では、この超越と内在の問題を中心に簡潔に考察する。超越神の考えは、神と人との絶対的懸隔に基づくゆえに、人間抑圧の原理に転じやすい。それに対し、汎神論（内在神）に

においては超越的神は排されるが、人格性を失うなどと非難される。西田がとろうとした立場は、ともに片寄らず、しかも両者の意義を活かす立場であったとみられる。すなわち、超越による「己を失う」という側面と、内在による「己を得る」という側面とを、ダイナミズムの中に活かす道であった。そこに西田の宗教論の基本的性格がある。

この『善の研究』で定位した基本的考えは、最晩年の宗教的論文（「場所的論理と宗教的世界観」昭和20年執筆）でもほとんど変わっていない。

第五章 西田哲学とコギトの問題

西田にとって、真実在とは何かという問題と、徹底的懐疑によってそれを遂行するという方法において、デカルトのコギトのあり方はきわめて重要であった。またコギト解釈は、西田にとって西欧形而上学との対決という面をもっている。本章では、『善の研究』から晩年に至るまでの西田におけるデカルトのコギト解釈を通覧的にみるが、それとともに、西田哲学における自覚の深まりの経緯と意義を発展史的に把握する。

すでに『善の研究』においてデカルト的出立点がみられるが、コギトの命題が推理か直観かという問題はペンディングにされていた。コギトの再解釈の努力が以後始まる。『自覚に於ける直観と反省』（大正6年刊）で西田が「自覚的自己」の概念を打ち出し、自覚の立場を鮮明にし、この立場が「場所」にいたることで独自の論理形成がなされていくことはすでに論及したが、それはまた西田自身のコギトの成立を意味するものであった。『働くものから見るものへ』（昭和2年刊）では「無なる自己に自己を映す」という自覚の構造が語られ、いわゆる述語的論理が示される。さらに『一般者の自覚的体系』（昭和4年刊）では、デカルトの「我あり・スム」は述語的存在の意義でなければならないと明言する。

絶対無の全容が示される『無の自覚的限定』（昭和7年刊）は西田哲学の一つの到達点であるが、この著作には積極的かつ明瞭なデカルト記述がみられる。西田はデカルトのコギトはノエマ的であり、結果的に「我」は形而上学的意義をもってしまったという。それに対し、パスカルから始まる内感哲学におけるサンチマン sentiment にこそノエシス的なものがみられるという。ただそれはまだ主観的であり、「行為的自覚」に達していないと西田はいう。西田が「行為的自覚」というとき、それまでの直観主義の転回が意味されている。この頃から盛んに「個物は個物に対して個物である」といういい方をする。ここからコギトを解するとき、デカルトのコギトは個物の自己限定であったのに対し、本来のコギトは個物と個物の相互限定として、具体的世界の定立を意味することになる。

『哲学論文集第一』（昭和10年刊）では、考える自己も自身を限定する世界によって媒介されたものであるとし、この世界を「弁証法的一般者」と呼ぶ。ここに我も世界の自己限定（世界の我）として考えられることになる。『哲学論文集第三』（昭和13年刊）ではライプニッツ哲学のモナドと世界の関係に注目し、「表現 exprimer」を「矛盾的自己同一」としてとらえている。そして『哲学論文集第五』（昭和19年刊）の「自覚において」の論文では、一般に論理形式は世界の自己表現の形式であるとし、コギトは「世界自身の自覚」であると述べている。

晩年の「デカルト哲学について」（昭和19年執筆）では、デカルトの意義を古代ギリシャからカントにいたる西洋哲学史上に位置づけている。そして哲学の立場は「否定的自覚」であると西田は主張する。これは「見るものなくして見る立場、考えるものなくして考える立場」であり、古来、哲学はこの立場において始まり、発展してきたと西田は述べている。

論文審査結果の要旨

本論文は西田幾多郎の哲学的核心を「自覚の哲学」として特徴づけ、『善の研究』から『自覚に於ける直観と反省』に至る前期西田哲学の展開を詳細にたどりながら、近現代の西欧哲学との対比を試み、自覚的論理の形成過程を内在的に解明しようとしたものである。全体は第一部「自覚の哲学としての西田哲学の生成」全4章および第二部「西田哲学の展開」全5章からなる。

第一部第一章「〈自覚〉前夜の西田哲学」においては、心理主義的とも見られる「純粹経験」の立場から、それを論理化する「自覚」の立場への移行が、いかにして成し遂げられたかが考察される。自覚の論理とは「自己」自身を問題とする論理のことであり、そのため西田は新カント学派、とりわけリッケルトの論理主義を検討することから出発する。西田は客観的知識を個人的主観から切り離すリッケルトの立場を、無限に進行する純粹経験の概念に依拠して批判しつつ、デデキントによる無限の定義とロイスによる「自己代表的体系」を手がかりに「自己の中に自己を写す」という自覚の萌芽的把握に到達する。ここに西田は「発展する論理」の原型を見るのである。

第一部第二章「〈純粹経験〉の理解をめぐる」では、一転して高橋里美による『善の研究』への批評が取り上げられる。事実と意味の区別をめぐる高橋の批判は、西田をして「純粹経験における意味と事実の結合」を裏付ける必要を感じしめ、それが『自覚に於ける直観と反省』の考察へと結びついていくからである。論者はこの論争の意義を「(西田は)この批評に答えることによって、自己の立場をより一層鮮明に意識することができたとともに、次の展開へ向かっての足がかりと課題とを得ることができた」と評価する。

第一部第三章「自同律と自覚」は、次の第四章とともに『自覚に於ける直観と反省』の論述を詳細に検討したものであり、本論文の中核部分をなす章である。まず論者は西田哲学においては「すべて論理は自覚的意義をもっている」ことを確認した上で、「自同律と自覚」の問題に焦点を合わせる。この問題こそが自覚の論理の構築にとって不可欠のステップとなっているからである。自同律は一般に「AはAである」と定式化されるが、西田によればここには思惟と論理が一体であること、すなわち自覚が含意されている。この自覚はフィヒテの「事行」概念を介して存在と当為が一つであることとして捉え直される。しかし、フィヒテが自同律を自覚によって基礎づけようとするのに対し、西田は自同律がそのまま自覚の意義をもつと考える。ここから論者は、西田が「AはAである」という自同律の構造を「我が我を知る」という自覚の意識に求めている点に、明示的な「自覚の論理」の定礎を見るのである。

第一部第四章「経験と時間」は、『自覚に於ける直観と反省』の論理展開をベルクソンの時間論との対質という観点から解明したものである。西田はベルクソンの「純粹持続」が意識の無限の発展を捉えていることを評価しつつ、他方でそれが反省的立場に留まり、「永久の今」を成立させる意志の契機を見逃していることを指摘する。さらに西田は、ベルクソンの「エラン・ヴィタール」を経験と時間が一つになる「自覚的体系」として捉え直し、時間の考察に目的論的観点を導入する。論者はこの点を時間論に新生面を開き、歴史解釈にも有効性をもつものと評価しながらも、西田が目的論的因果の究極原因を「意志」に求めたことを、時間を永遠化し、反省不可能な神秘的なものを残してしまったのではないかと批判する。この批判は「自

覚」と「意志」との両立可能性を問うものであり、この時期の西田哲学の急所を突く指摘として評価できる。

以上、第一部における考察は、これまで「純粹経験」や「場所の論理」にのみ光が当てられ、過渡期の議論として等閑に付されてきた「自覚」の時期の西田哲学を主題的に取り上げ、その成立過程と論理構造を原典に即して詳細に跡づけるとともに、その限界をも明らかにしたものであり、西田哲学研究に新たな展望を開くものである。

続く第二部「西田哲学の展開」において、論者は考察の範囲を「場所の論理」成立以降にまで広げ、ヘーゲル批判、宗教論、コギトの問題等のトピックに即しながら、西田哲学の多面的構造を解明することを試みる。

第二部第一章「左右田喜一郎の西田哲学批判」は、左右田が提起した「場所の論理」への批判を五項目にまとめ、それぞれに対する西田の回答を検討したものである。論者は、左右田の新カント学派の見地からする認識論的批判に対し、西田が認識論を「自覚の立場」から再構築して回答していることに注目し、この論争がその後の西田哲学の展開にとって重要な意義をもっていたことを確認する。

第二部第二章「西田幾多郎におけるヘーゲル」は、初期から昭和六年前後までの論述を手がかりに、西田のヘーゲル解釈とそれに伴うヘーゲル批判を鏡として西田哲学の基本性格を浮き彫りにしたものである。「場所」以前の西田は、自らの純粹経験をほぼヘーゲル論理学の線に沿って説明しているが、「場所」以後の彼は一転してヘーゲル弁証法に対する積極的批判を展開する。論者によれば、「絶対無の自覚的限定」に基づいた「真の無の弁証法」を立脚点としてヘーゲルの弁証法を「有の弁証法」ないしは「過程的弁証法」として批判することを通じて、西田は独自の立場を確立して行くのである。

第二部第三章「宗教論（その一）」および第四章「宗教論（その二）」は、『善の研究』以来西田哲学の根底を流れている彼の宗教観を検討することに当てられている。まず論者は書簡や小論を手がかりに若年の西田の思索がロマン主義的傾向に彩られていたことを指摘し、その上で『善の研究』における神観念が「そこへと万物が統一されるところの宇宙の統一力」へと集約されていることを明らかにする。そこに残されているのは、超越と内在の関係性という問題である。西田が到達したのは、「己を失う」という内在から超越へのベクトルと「己を得る」という超越から内在へのベクトルとが共存して宗教的生の緊張を作り上げるような地点であった。論者によれば、この「内在的超越」ないしは「超越的内在」のダイナミズムこそが、西田の初期から晩年までを一貫して貫いている宗教観なのである。

第二部第五章「西田哲学とコギトの問題」において、論者は西田によるデカルトのコギト解釈の変遷を通覧しながら、そこに事的世界への還帰という彼の「転回」を読み取り、デカルト的懐疑の不徹底を「否定的自覚」によって乗り越えようとした点に西田哲学の到達点を見る。西田はまず「コギト・エルゴ・スム」の全体を反省＝直観の立場から「自覚の事実」を表したものと特徴づけるが、後にはそれを「我に於て」ただちに「コギト」と「スム」が成立すると考え、コギトを「世界自身の自覚」として捉え直すにいたる。ここに論者は、意識的自己から「事実としてある自己」への自己概念の転回、さらには「事的世界」への還帰を見る。この「事実の立場」への転回を通じて、西田はデカルトの懐疑が自己の存在までも疑いながら理論そのものへは疑いが向けられなかったこと、すなわち否定的自覚にまで達しなかったことを批判する。論者はこの否定的自覚を「絶対的コギト」と呼び、そこにこそ西田哲学にとってのみ

ならず、われわれ自身にとっての「哲学の現場」が存在することを確認して論を閉じる。

以上の第二部の論述は、西田哲学の多面的広がりや現代的可能性をヘーゲルやデカルトとの対比を通じて明らかにしており、示唆に富むものである。とりわけ、コギト解釈を基盤にして西田哲学の到達点を「絶対的否定的自覚」に見る最終章の結論は説得的であり、従来の西田解釈には見られなかった論点として評価できる。ただ、敢えて望蜀の言を呈すれば、第二部の各章を結びつける統一的視点からの論述に今少し配慮がなされるべきであったと思われる。それぞれの章が完結性をもっているため、相互の関連が見えにくい憾みが残るからである。

総じて本論文は、これまで過渡的な位置づけをしか与えられてこなかった「自覚」の時期の西田哲学に焦点を合わせ、テキストの厳密な読解に基づいてその形成過程を跡づけるとともに、西欧の諸哲学者との比較を通じて西田の主張の独自性を明らかにしたものである。論述は難解で飛躍の多い西田の文章をよく噛み砕いた上でなされており、また議論の展開も周到な裏付けをもって間然するところがない。以上のことから、本論文がわが国の西田哲学研究に新たな一頁を付け加え、その学問的發展に寄与するものであることは疑いを容れない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。